



## 私の趣味 《1》

# Sailing

志賀 剛 (志賀皮膚科)

横浜市大研修医のころ、神経科の指導医に菅野道先生がおられた。脳波を教えてもらいながら彼のボートに乗せていただき海のよさにひかれるようになった。

後に帝京大の教授になり、今でもときどきハーバーでお会いする。マンションに誘って下さるが精神分析の対象になるのを恐れ、挨拶程度に留めている。最近デンマーク製の新艇にかえたようである。

はじめは20footの小型yacht BlueWater20Dで父とsailingを楽しんでいた。海軍出身でガダルカナルなどの激戦をくぐってきたせい、海には強かったし、こよなく海が好きだった。海軍兵学校生徒のころ、舟酔いになると履いていた靴下に吐き、後で食べさせられた為二度と酔わなくなったという。館山や伊東などにクルージングに行ったりもした。そのあと琵琶湖にあった中古艇でめっぽう強風に強いサ



FRIEDAをsailing中の私

ムライSamouraiに20年程のる。父が逝った後はひとりで所謂singlehand sailingを楽しんでいる。

フランス人ミッシェル・ビゴアン設計の24footで、しっかりした作りの船だった。2年前に今のフィリップ・アレー設計で不沈構造が特徴の26footのエタップ26iにかえた。ベルギー製で居住性は格段によくなった、しかし腰があまり強くなく強風時癖が出やすい、ウェザーヘルムが出やすいとヨットマンはいうが、扱いにくく、eine alte Liebeであるサムライを懐かしく思い出している。船名は、チェコの作家Franz Kafkaの<城 Das Schloß>に出てくる村の酒場の女給で主人公Kが城の高級官吏クラムとの仲を疑いつつ結婚を決意したFriedaにしたのである。風が強い日は出航せず、船内で酒でもひとり飲みながら男の隠れ家としてFRIEDAを楽しんでいる。



シーボニアでの進水式でシャンペンをかけているところ

## 私の趣味 《2》

# 趣・職・住 大接近

杉山安洋 (杉山皮膚科)

ボクの仕事場(杉山皮膚科)は、JR大磯駅から歩いて3分の所にあります。

日本最古の海水浴場として有名な大磯海岸は、駅から6分です。つまり、ボクの仕事場から海岸へは

3分しかかからないのです。

また、ボクは、この町のはずれに住んでいるのですが、海へは歩いて30秒で出てしまいます。

早起きすれば海で遊べ、昼寝しなければ海へ行けるのです。

こんなすばらしい環境を見逃す手はない。今すぐ何とかしなければ、と考えるのはボクだけでしょうか。

窓を開けると港が見えるのは、確か横浜でした。大磯の我が家では、窓ごしに海が見えます。朝一番、この窓から「波を見る」事がボクの一日の始まりです。ただ見るのではなく、診<sup>み</sup>るのです。そう、神奈川県皮膚科医会の皆様が、患者さんを診察する時の、あのまなざしです。診るべき項目は多数ありますが、ここでは全て省略致します。

項目のほぼ半分に〇<sup>マル</sup>が付くと、goサインが出ます。どこにgoするかと言えば、seaにgoです。何しにseaにgoかと聞かれれば、go surfing<sup>サーフィン</sup>なのです。

Surfing。「波乗り」。おもしろいっせ。やめられまへんがな。関西弁でっせ。

波乗りをしていると、常に頭から離れない事があります。月や天気です。

もちろん、皮膚科軟膏処置の点数も忘れたことはありません。

賢明な読者の皆様は、もうお分かりかと思えます。そうです、その通り。この2つの要素がからみ合って波に変化を与えるのです。

まあ、いくつかの例外はありますが、干潮、新月、満月(大潮)、低気圧の通過などで波が立って来ます。

月、天気や潮などとは無縁の生活を送っていた頃を思うと、今の生活がとても心地良く、そんな中にいられることを感謝しています。

昔は、雨が嫌いでした。雨の翌日は波があるので、今では嫌いじゃなくなりました。

風がビュンビュン吹いて、雨がザーザー降っている晩は、もうワクワク、ソワソワ。遠足前夜の小学3年生男子の様です。早く寝てしまおう！とビール3本(350ml缶)、日本酒2杯を大急ぎで摂取すると、猛ダッシュでフトンの中へ。目をギュッとつぶしても入眠困難。仕方なしに波の音を数えていると、いつしか夢の中。

ザブーン、ザブーンと波の音で早朝覚醒。

遠足の朝の少年は飛び起きます。しかし、不眠症の中年波乗り男は、飛び起きることができません。

「どっこいしょ」のかけ声と共に腰のストレッチ。猫の様に腰を丸めて、いーち、にーいと20まで数えます。以前飛び起きて、腰をグキッとやってしまったこと2回。今は慎重です。

次に足首をグリグリ回して、ゆっくり起き上がります。

それから例の「窓ごし波チェック」。いい波、となるとネスカフェ1杯。大磯の朝もネスカフェと共に明けるのです。

用をたして荷物丸めて「しゅっぱあつ」。家族は寝ているので、もちろん小声です。

自転車にまたがると、5秒で海の見渡せる自転車道へ出ます。

朝の空気を顔面に感じ、心拍数を上げながらサーフィンのポイントめざしてペダルをこぎます。

右手には相模湾。冬になると、大気温が下がり海から水蒸気がたち昇って、さながら相模湾温泉になることもあります。

ポイントに着くと、パドリングで沖に出ます。波が来るまで波待ちです。このまったりとした時間は、ボクにとって営業の時間です。「日焼けがさー」やら「クラゲにねー」の言葉に「ウチに来るといい薬あるよ」と、すぐ反応するのです。

いいぞ！と思う波が来ると、クルッと反転。岸に向かってパドリング。せまり来る波とパドリングの



仲間の集まるクラブハウスで



窓越しの「波チェック」

スピードが一致すると、波が自分を追いこす瞬間、板が波の斜面をスーッと滑り出します。その時を逃がさず立ち上がり<sup>ゲットオフ</sup> get off!

良い波に乗りたくて毎日海に来る人々は、ほとんど定職を持っていません。天気や潮に合わせられる仕事なんて、そうめったに無いからでしょう。我が診療所の診療時間が、潮の干満と一致して来たら、

こりゃやばいなと思って下さい。

今年は異常気象とやらで、台風がたくさんやって来ました。浮かれて毎日海へ行っていたら、板が折れてしまいました。女房様にお願いして、每晚ビール1本減を条件に、新しい板を買ってもらいました。経費では落とせそうもありません。

今、大磯の仲間うちでは、杉山皮膚科は板の料金を上乘せした金額を請求する、とのウワサがあります。そんなことは絶対にありませんっ、とこの場をお借りして申し上げます。

不要な採血、無駄な投薬などいっさい行っておりません。保険委員の諸先生方、9月分のレセプトをよーくチェックして下さい。

最近困った事が起きました。新しい受付けの方が、釣り大好き人間だったのです。チョット教えて頂いた所、バンバン釣れてしまうのです。

また1つ趣味が増えてしまいそうです。



## 私の趣味《3》

# 仏教遺跡遍歴

内藤静夫 (小田原市立病院皮膚科)

趣味と言えるものかはわかりませんが、私が仕事以外で興味を持ってやっていることと言えば、主に海外の仏教遺跡への旅行でしょうか。私の海外旅行は、昭和58年のヨーロッパから始まり、今年平成16年のミャンマーで32回となりました。当初は東西ヨーロッパやアメリカでしたが、その後シルクロード中心の旅となり、数年前から仏教遺跡を巡る旅となってきました。シルクロードについては、西のローマからバルカン半島、トルコ、イラン、パキスタン、ウズベキスタン、中国新疆ウイグル自治区を経て中国の西安まで10回程に分けて旅行してきました。シルクロード周辺では、エジプトやインド、ネパールにも行きました。これらの旅行を続けるうちに、私の興味は次第に仏教遺跡に向かってまいりました。それは、私の精神的支柱を仏教に求めていたからかも知れません。それでは、私の仏教遺跡遍歴の旅を

綴っていきたいと思います。

まずは中国3大仏教石窟の第1である敦煌へは、平成10年に訪れました。ちなみに、他の中国3大仏教石窟のうち、洛陽龍門石窟は既に訪れていますが、ここでは省略させて頂き、大同雲岡石窟については後で述べさせて頂きます。敦煌莫高窟は砂漠の大画廊とも呼ばれ、皆さんのなかでも既に行かれた方もいらっしゃると思いますし、日本でも多くの解説書や写真集が出されていますので、あらためて説明は不要と思いますが、一生に一度は訪れる価値のある所だと思います。北魏から唐時代を中心に元時代までの何百という石窟があり、それらの内部にはたくさんの仏像と壁画が残されていますが、百聞は一見に如かずですので、まだの方は是非一度訪れてみて下さい。

続いて同じ年の暮れに訪れたのが、インドのアジ

ヤンタ・エローラ石窟寺院です。このうちエローラは主にヒンズー教の寺院ですので、省略させて頂き、アジャンタについて述べたいと思います。この紀元6世紀頃に造られたアジャンタで特筆すべきは、第1窟に描かれている蓮華手菩薩です。この菩薩の顔の雰囲気、特にその目つきは、法隆寺金堂第6壁阿彌陀浄土図右に描かれている観音菩薩と非常によく似ています。この菩薩を見て、震えるような感動を覚えました。なぜ感動を覚えたかという点、インドと日本と何千キロも離れたところで、しかも1400～500年前に同じような絵が描かれていることからだと思います。しかし、やはり現地に行って直接見ないとこの感動は得られないと思います。

平成11年には、中国新疆ウイグル自治区クチャを訪ねました。クチャはキジルとクムトラの2つの石窟に飛天などの素晴らしい壁画が残っていますが、法華経など多くの仏典を翻訳したことで有名な鳩摩羅什の故郷でもあります。クチャは昔亀茲国と呼ばれ亀茲楽という音楽でも有名で、これが日本に伝わって雅楽になったと言われています。実際クチャの石窟には、五弦琵琶の絵があり、正倉院に残る五弦琵琶との関連性が想像されます。また、クチャの踊りも有名で、現在も美しいクチャ娘の素晴らしい踊りを見ることができます。この旅を終えて翌年に、私は国立熱海病院から小田原市立病院へ移りました。

平成12年には、インドネシアのジャワ島にあるボロブドールを訪れました。ボロブドールは8世紀頃に造られた大乘仏教の遺跡で、後に訪ねるカンボジアのアンコールワットとミャンマーのバガン（パガン）と合わせて世界の3大仏教遺跡に数えられています。このボロブドールで圧巻なのは、4段の回廊に見られるレリーフで、釈迦の生涯・前世の物語や華嚴経の世界が見事なレリーフで表現されています。近くには、小さな仏教寺院やプランパナンという大きなヒンズー寺院があり、一見の価値があります。

平成13年には、中国大同雲岡石窟を訪れました。ここは、中国3大仏教石窟の1つに数えられ、紀元5世紀頃の北魏時代に造られた20余りの石窟からなり、多くの石像やレリーフが残っています。ここはまた、大正9年我々皮膚科医の大先輩であり文学者としても有名な太田正雄先生即ち木下杢太郎が訪れ『大同石仏寺』を記した所でもあります。太田正雄先生は、太田母斑で有名な皮膚科医でもあり文学者

としても著名ですが、仏教美術にも造詣が深かったことは案外知られていないのではないかと思います。生まれ故郷の伊東市にある木下杢太郎記念館に太田先生の描いた仏像の絵が展示され、それらの絵葉書も売られていますので、是非訪れてみて下さい。

平成14年の9月には、カンボジアのアンコールワットを訪れました。アンコールワットは、ヒンズー教寺院であるアンコールワットと仏教寺院であるアンコールトムからなりますが、いずれも12世紀に造られました。私の訪れたのが雨期であったにもかかわらず幸運だったのは、アンコールワットからの日の出を見ることが出来たことでした。しかもこの写真を撮ることができ、年賀状に使うことが出来ました。私はだいたい年1回9月頃海外旅行に行き、その時撮った写真を翌年の年賀状に使うことを10年以上続けてきました。これは今後も出来る限り続けていきたいと思っています。

平成15年には、タイのスコタイとシーサッチャナライを訪ねました。タイにも多くの仏教遺跡がありますが、それらのほとんどが上座部仏教のもので、なかでもこのスコタイとシーサッチャナライのものが最も優れていると思います。このいずれの遺跡もひじょうに静かなたたずまいの中にあり、こころが落ち着きます。上座部仏教は各々自らが修行をして、さとりを目指すもので、より釈尊本来の教えに近く、私自身も日本に伝えられた大乘仏教よりもこちらの教えの方に共感を覚えます。もちろん在家信者としての私では、さとりとはいずれも程遠い段階ですが、細々とヨーガを続けており、少しでも安定したところを持つよう今後も努力していきたいと思っています。

昨年平成16年9月には、ミャンマーに行ってきた。ミャンマーは未だに軍事政権の国で、何か恐ろしい国かと思っている方もいらっしゃるかも知れませんが、実際は治安も良く、旅行するにはむしろ望ましい国の1つと言えます。ミャンマーでもっとも有名なのはバガンの遺跡でしょう。これは11世紀頃に造られたもので、現在も2000以上の寺院やパゴダが残っており、高い寺院に登ってそれらを360度一望すると、感動するものがあります。また寺院の中には、インドからの影響が感じられる鮮やかな壁画が残っており、一見の価値があります。ミャンマーの人々はタイと同じく上座部仏教を信仰していますが、より信仰深く、毎朝お経を唱える人が多いよ



うです。また八曜日というのがあって、それぞれ動物が決まっています。自分の生まれた曜日の動物をお

祈りすることになっています。因みに、私の場合は金曜日で、動物はもぐらです。左の写真は、首都ヤンゴンにあるシュエダゴンパゴダでお釈迦様ともぐらに水をかける筆者です。

以上、平成10年からの私の仏教遺跡の遍歴をとりとめもなく書いてきました。読者の皆様にはつまらない話だったかもしれませんが、1人でも興味のある方がいて、何かの参考になれば幸いです。今後も私の仏教遺跡遍歴は続いていく予定で、次回できれば平成17年はスリランカに行ってみたくと思っています。



## 私の趣味《4》

# プロレスLOVE

相川洋介 (クローバー皮膚科・内科クリニック)

試合と試合のインターバルに電気掃除機「風神」でリングの上を掃除する、この生CMをご存じの先生は多数おられるでしょう。これは日本テレビ～よみうりテレビ系列の三菱電機提供のプロレス中継の名物シーンで、私にとってもプロレス初遭遇時の忘れられないシーンでした。当時のプロレス界は「日本プロレス」が日本最大の団体として君臨していました。主力選手は、力道山亡きあとエースとなったジャイアント馬場を筆頭に、ストロングスタイルを標榜するアントニオ猪木、いぶし銀のテクニクで客をわかせる吉村道明、一本足頭突きで相手を次々と倒していく韓国の英雄・大木金太郎らが、銀髪鬼やら鉄の爪・黒い魔人・生傷男・人間発電所など税関で入国拒否されそうな物騒なニックネームを持つ外国人レスラー達と死闘を繰り返していました。毎週金曜日の夜8時になると、当時小学校低学年だった私は眠い目をこすりながら、プロレス好きの祖父と2人で我が家の特別リングサイドに陣取っていたものでした。小学校・中学校時代には、家の近くにプロレス巡業が来ると、父親にねだりチケットを手に入れ、カメラ小僧となって会場を走り回っていました。余談ですが、田舎のプロレス興行は大都市の

ものとは趣が異なり、夏祭りや村興しのイベント的な感があり、五寸釘やフォークで対戦相手を流血においやる悪役のアブドーラ・ザ・ブッチャーでさえも子供と一緒にかき氷を食べていたり、普段ブルロープを振り回し観客を蹴散らして入場してくるスタン・ハンセンも銀縁のメガネをかけ、柔らかな笑みをうかべながら子供と笑顔でキャッチボールをしていたりと、どこかのどかな雰囲気がありました。しかしLIVE観戦の醍醐味は、リング上の手に汗握るスリリングな攻防や、観客を巻き込むド派手な場外乱闘を自らが直接体感することなので、地方のイベント的な興行では物足りなさを感じるようになり、ブ



大ファンの長州力選手と私の息子

ラウン管内と同じ過激な闘いを求めて都会へと進出していくようになりました。高校時代には、内申書に影響するからくれぐれも受験するようにと言われた模擬試験をすっぽかし、猪木とプロボクシング世界ヘビー級チャンピオンのモハメッド・アリの異種格闘技戦を日本武道館まで観に行き担任の先生を呆れさせました。大学6年時にはポリクリを腹痛と偽り病院を抜け出し、新幹線に飛び乗って、当時大ブレイク中の長州力とスタン・ハンセンの一騎打ちを大阪城ホールまで観に行ったこともありました。

世間の人々の大半はプロレスという言葉を目にすると、未だに野蛮だとか、八百長だとか、あんなもの何がおもしろいんだという言葉が口をついて出てきます。最近、プライドや総合格闘技に押され気味のプロレス界は、なおさら辛口のコメントにさらされています。私の友人にも同様の反応をする輩が多く、その中でも特に親しい友人にはあえて反論せず、「とにかく観てみるよ」とだけ言って会場に連れていきました。最初馬鹿にしていた友人達も1回でもリングサイドで試合を目の当たりにし会場の雰囲気を経験してしまうと、その不思議な空間に引き込まれ2度とプロレスを軽視する発言はしなくなります。そして必ずリピーターとなって会場を訪れます。このようにして私のプロレス仲間は確実にその数を増していったのです。医者になってしばらくの間は、時間を拘束され自分の時間も儘ならず、以前に比べプロレス会場に足を運ぶ回数はめっきり減りましたが、幸運なことにも長年のプロレス追っかけ活動が実を結び？、レスラーやプロレス関係者の知り合いができ、かつてブラウン管の中で観た憧れの人達と話をしたり、酒を飲んだりする機会をもてるようになりました。プライベートでのレスラーとの付き合いは、普段周りは医者ばかりの生活を送っている私にとってプロレス界という未知の世界を体験できる満足感と、有名人と今一緒にいるんだというミーハー的な優越感を得られる至福の時となるのです。しかし、プロレスの追っかけの原点はあくまでも試合のLIVE観戦にあるので、興味のあるビッグマッチの宣伝を目にすると、スケジュールを調整し、さらに女房や子供（最近では子供の了解をとるのが一苦勞です）の許可を得て、仲間と会場へ出かけて行くのです。そして最近新たな楽しみとして加わったのが観戦後のグルメツアーです。いかにテンション

を下げずに最後まで盛り上がるかを考え、普通の居酒屋でなく元プロレスラーがやっている店を訪ね、ブースター効果によるさらなる興奮を得ようとするツアーを思い立ちました。今回このような投稿の機会を得ましたので、私の趣味だけでなく、日頃お世話になっている店の宣伝もかねて紹介させていただくこととしました。交通の便の良い東京水道橋にあり、プロレスのメッカと言われている後樂園ホールから飯田橋方面へ徒歩で約10分、小石川運動場近くにある、串焼きとちゃんこの店『かぶき』が今回お奨めの店です。名前からわかるようにオーナー（大将）は、テキサス州ダラス地区で歌舞伎をイメージしたペイントとコスチュームに毒霧やスンチャクなどを使ったデモンストレーションで人気を博し、東洋の神秘と言われたグレート・カブキさんです。メニューはプロレス技の名前の付いたユニークなものが多く、中でも赤の毒霧（ニンニク&味噌キムチ鍋）とアッパーブロー（つみれ鍋：ポン酢）、オリエンタルクロー（鳥鍋：味噌だれ）は元力士のカブキさんならではのちゃんこ鍋で味は絶品です。値段も驚くことに居酒屋並みで良心的です。ご興味を持たれた先生は是非足を運んでみて下さい。旨い酒と旨いちゃんこ、そして気さくな大将を交えてのプロレス談議。飲むほどに酔うほどに楽しいひとときはあつという間に過ぎてしまいます。

スポーツジム、JAZZサックス、落語、テニスと私の趣味は多数ありますが、日頃のストレス発散と、明日への活力補充には、やはりプロレスが一番です。

※串焼きとちゃんこ かぶき

東京都文京区後楽2-3-17 米虫ビル1F

☎03-5800-5801

営業時間／17：30～23：00



『かぶき』にて。左より私、相川とカブキさん、順天堂皮膚科・溝口将之医局長